

名前がそっくりなので、「介護保険はドイツを手本にしたもの」と思いこんでいる人がよくいます。無理ありません。若手官僚が誤解をわざと、そのままにしたからです。政権の実力者、高齢の男性政治家は、一緒に戦争をしたドイツが大好き、北欧を快く思っていなかったからです。

図は介護保障を2つの軸で分類してみたもので、円の面積は財源の大きさを表しています。X軸は社会保険料か租税か、Y軸は中央集権的か市町村主権か。税方式といっても、中央で細かく決めていた日本と北欧では結果はまったく違います。介護サービスのメニューも、自治体を介護政策の主役にすることも、北欧がモデルで、「ドイツを手本に」と考えている官僚はいませんでした。(詳細は、岩波書店『物語・介護保険』を)

1984年、朝日新聞科学部の医学担当から論説委員室に異動した私は驚きました。厚生行政最大の課題が、「西暦2000年、日本の寝たきり老人は100万人になる」だったからです。老人病院に足を踏み入れると、誇りを剥ぎ取られうつろな表情で病院的ベッドに横たわる「寝たきり老人」があふれていました。

解決の糸口を見つけようと高齢化が日本より進んだヨーロッパの国々を訪ねると、「寝たきり老人」という「言葉」も「概念」もありませんでした。貯金をおろし、休みのたびに何度も訪ねて、その秘密をつきとめました。

生活の節目に現れるホームヘルパー。その月収は勤務医の約6割／誇りと願いを大事にして必要なサービスを組み合わせる訪問ナース／入院中から退院後のプラン／自立を助けるさまざまな補助器具と住宅改善／国民すべてがもつ家庭医という専門医／市町村に、現場に、権限と責任／「財布を預けて、安心と連帯」という政治や行政への信頼の文化。

「発見」を私は、社説に書き、『「寝たきり老人」のいる国いない国』（ぶどう社）にまとめました。本は31刷になり第1章は介護保険制度のメニューになりました。けれど、ホームヘルパーの待遇は低く抑えられ、分権の文化も定着しませんでした。

認知症も深刻な問題になりました。日本の精神病院ベッド数は世界の2割、人口は世界の2%以下なのにです。そこに認知症の人々が吸い込まれていきます。一方、日本には、世界の専門家が感動する認知症ケアがあります。違いは、居場所と味方、そして、誇り。これからのケアのキーワードです。

一喝破風雲



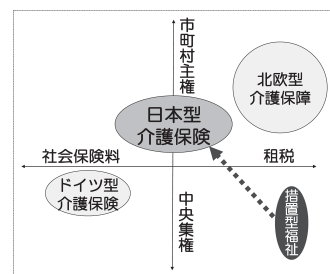
介護保険の持続可能性の前に、 介護人材の持続可能性を

——誇り・味方・居場所をキーワードに

大熊由紀子

国際医療福祉大学大学院教授

おおくまゆきこ： ジャーナリスト。福祉と医療・現場と政策の「新たなえにし」を結び・志の縁結び係&小間使い。19ヶ国の6000人をメールとホームページ <http://www.yuki-enishi.com/> でつなぐ。著書は他に『誇り・味方・居場所～私の社会保障論』（ライフサポート社）など。



「一喝破風雲」は本財団創設者・後藤新平の書(自作漢詩)の一部。読み下しは「一喝風雲を破る」。